

Press Release 2020.12

東京オペラシティ アートギャラリー 今後の展覧会スケジュール

千葉正也個展

2021年1月16日 [土] - 3月21日 [日] *55日間

世界中から熱望される大型個展、いよいよ開催



千葉正也(1980-)は、国内外での展覧会を経てアメリカの公立美術館に作品が所蔵されるなど国際的な評価が高まり、個展を熱望されてきました。

千葉はまず、紙粘土や木片で人型のオブジェを制作、寄せ集めた身の回りの品々とともに周到に配置して仮設の風景を作ります。これを、木、金属、プラスチックなどの質感を精巧に描き分ける卓抜なテクニックを駆使して絵画化します。こうして完成した作品を、自作の簡素な木製スタンドに置いたり、一定時間ごとに作品を入れ替えたりするなど、あらためて現実の空間に展開させることによって、絵画と彫刻の境界を渾然一体化させます。

古今東西の絵画表現のさまざまな達成や成果を誠実に継承しつつ、現代アートの枠組みに対して、絵画という長い歴史をもつメディアを通じて揺さぶり動かそうとする大胆不敵なアプローチは実にユニークで、エキサイティングな鑑賞体験をもたらしてくれることでしょう。

本展では千葉が飼育している亀が展示会場内に現れます。亀の視線でも展覧会をお楽しみください。

《タートルズ・ライフ #3》2013年 油彩、キャンバス 東京都現代美術館蔵 ©Masaya Chiba / courtesy of ShugoArts

同時開催：収蔵品展 070 難波田龍起 初期の抽象 / project N 81 小瀬真由子

「ストーリーはいつも不完全……」 「色を想像する」 ライアン・ガンダーが選ぶ収蔵品展

2021年4月17日 [土] - 6月20日 [日] *57日間

コンセプチュアルアートの新潮流を代表するアーティストと寺田小太郎氏の対話 ともいうべき収蔵品展



イギリスを拠点に活動し、国際的な注目を集めるライアン・ガンダーが東京オペラシティアートギャラリーの収蔵品展を手掛けます。イギリスのロックダウンにより当初予定されていたガンダー自身の個展の開催延期を決めた際、ガンダーから「この状況で僕にできることはないだろうか」との申し出があり、当初上階で予定していた「ガンダーによる収蔵品展」を全館で開催することになりました。

日常生活のさまざまな物事に光を当て、あらたな視点で観察したうえで解釈し、表現するガンダー。その視点・考察・解釈が当館の収蔵品に向けられたら……。当館収蔵品は故寺田小太郎氏によるプライベート・アイ・コレクションであり、これはガンダー×寺田小太郎の一对一の会話といえる展覧会でもあります。

どんなに困難な状況でも冷静に考え、発想の転換でよりよいものにしようとするガンダーの姿勢に励まされて、私たちの新しい挑戦となるこの展覧会にポジティブに取り組んでいます。

小山穂太郎《Cavern》2005 photo: 早川宏一

同時開催：project N 82 松田麗香

加藤翼 縄張りとは

2021年7月17日 [土] - 9月20日 [月・祝] *56日間

コロナ禍で気づかされた協働や連帯の可能性を問いかける



人々が知恵を出し合い、ロープと人力だけで巨大な構造体を引き倒したり、引き起こす〈Pull and Raise〉シリーズで知られる加藤翼(1984-)。互いに縛られた4人の白人男性がアメリカ国歌を演奏する《Woodstock 2017》(2017)、インディアン居留地での石油パイプライン建設によって移動を余儀なくされた小動物に焦点を当てた《Underground Orchestra》(2018)など、現代社会への鋭い批評に満ちた作品を次々に発表して、今もっとも注目を集めるアーティストの一人です。

自然災害、都市開発、環境破壊などで地域のコミュニティが解体の危機に瀕するなか、人々が自発的に参画し、一体となって何かを实践することの意義を提示します。新型コロナウイルス感染症のパンデミックという状況下において、また、国家や国民の二極化が世界的に危惧されるなか、加藤翼の作品は分断や対立を超えた協働作業や連帯による可能性にあらためて気づかせてくれることでしょう。

《Superstring Secrets: Tokyo》2020年 Courtesy of MUJIN-TO Production

同時開催：収蔵品展 071 寺田コレクションの日本画 (タイトル未定) / project N 83 衣川明子

和田誠 (タイトル未定)

2021年10月9日 [土] - 12月19日 [日] *62日間

イラスト、グラフィック、エッセイなど、多彩な活動で知られる和田誠(1936-2019)の仕事振り返る



軽快なタッチと優しい色づかいで描かれたイラストレーション、映画や音楽に関するエッセイ、ことばあそび満載の絵本など、誰もが一度は和田誠の作品を目にしたことがあるのではないのでしょうか。谷川俊太郎や星新一、丸谷才一などの本の挿絵、井上ひさしやつかこうへいの演劇のポスター、レコードやCDのジャケットなど、イラストレーションやデザインの仕事が広く知られていますが、自身のエッセイや絵本など、著作も数多く残しました。さらに、自ら監督をつとめた映画やアニメーション、立体作品、落語や演劇の台本、訳詞や作曲など、その創作はジャンルの垣根を超えて、豊かな広がりを見せています。私たちは和田誠の仕事を知ることであっても、その全貌を見る機会はそれほど多くはなかったでしょう。本展では和田誠の多彩な作品を展覧しつつ、和田の言葉や出会った人々、幼少期に描いたスケッチなどを交え、その創作の源流をひも解きます。

和田誠 ©Wada Makoto photo: 吉田宏子

同時開催：収蔵品展 072 難波田史男展 (タイトル未定) / project N 84 山下紘加

ミケル・バルセロ (タイトル未定)

2022年1月13日 [木] - 3月25日 [金] *72日間

欧州を中心に精力的な活動を続けるバルセロの日本初個展。



現代芸術を牽引する美術家の一人として欧州を中心に精力的な活動をつづけるミケル・バルセロ (1957-)の全貌を日本で初めて紹介する展覧会です。バルセロは1982年の「ドクメンタ7」での衝撃的デビュー以来、生地マヨルカ島をはじめ、パリ、アフリカなど、世界各地にアトリエを構え、各地の風土や文化、歴史と対峙するなかで制作をつづけてきました。バルセロ作品では、海と大地、動植物、歴史、宗教、闘牛、肖像といったテーマが大きな位置を占めており、いずれの作品も自然と人間の営みに対する深い愛情や尊敬、畏怖の念に根差しています。同時に、現代芸術の諸潮流にも関心を寄せつつ、鋭敏な感性により国際的なアートのコンテクストも視野に捉えてきました。本展では初期から現在に至るまでの制作活動を、絵画、素描、水彩など平面作品を中心に、彫刻、陶芸、映像も加えた約100点の作品によって紹介します。

《とどめの一突き》 1990年 作家蔵 photo: André Morin

同時開催：project N 85 水戸部七絵

■最新の情報は随時当館ウェブサイト、SNS および特設サイトでお知らせいたします。

■本プレスリリースに関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【広報担当】 市川・吉田

Tel : 03-5353-0756 / Fax : 03-5353-0776 / Email : ag-press@toccf.com